PICK UP MOVIE

©2020 Vivo film/Tarantula　Photo by Emanuela Scarpa

ミス・マルクス

〔2020年／イタリア＝ベルギー／英語・ドイツ語／107分〕
監督・脚本：スザンナ・ニッキャレッリ
出演：ロモーラ・ガライ、パトリック・ケネディ、ジョン・ゴードン・シンクレア、フェリシティ・モンタギュー、フィリップ・グレーニング

“前へ進め”

カール・マルクスの娘エリノア。
その知られざる激動の半生が、今明かされる――

〔あらすじ〕1883年、イギリス。最愛の父カールを失ったエリノア・マルクスは劇作家、社会主義者のエドワード・エイヴリングと出会い恋に落ちるが、不実なエイヴリングへの献身的な愛は、次第に彼女の心を蝕んでいく。社会主義とフェミニズムを結びつけた草分けの一人として時代を先駆けながら、エイヴリングへの愛と政治的信念の間で引き裂かれていくエリノアの孤独な魂の叫びが、時代を越えて激しいパンクロックの響きに乗せて現代に甦る。

エリノア・マルクス　Eleanor Marx　(1855-1898)

イギリス、ロンドン生まれ。子供時代から政治に強い関心を持ち、父の死後、その遺作や「資本論」英語版の刊行を手掛けた。また、「ボヴァリー夫人」やヘンリック・イプセンの戯曲を最初に英訳するなど文学作品や演劇作品の翻訳・上演にも注力、俳優としてイプセンの「人形の家」のノラを演じるなど演劇人でもあった。

〔上映日程〕10/2~15（休映：10/4）

マルクスの娘は、男女平等を目指した

コロナ禍による不況で、貧富の格差拡大など現代社会が内包する問題があらわになるにつれ、マルクスに関心を寄せる人が増えているという。革命によって被抑圧者たる労働者階級を解放し、平等な社会をつくろうと説いたマルクスだが、それを信奉していた末娘のエリノア・マルクスにとって、父親の思想とは何だったのか。

聡明だったエリノアは16歳から父親の秘書を務めた。のちには「資本論」を英訳し、社会の矛盾に積極的に挑んだ。彼女の考え方は当時としては革新的で、労働者だけでなく女性の権利向上を強く訴えかけていた。一方で戯曲や文学作品の翻訳を手がけ、イプセン作「人形の家」を自ら舞台で演じるなど芸術面でも意欲的だったという。

そんな豊かな才能に恵まれたエリノアが、私生活では密かな苦しみを抱えていた。社会主義者を名乗る劇作家エドワードに恋をして共に暮らしたが、彼の浪費癖や浮気癖に深く傷つき、それでも彼を見限ることができず世話を焼き続ける。思えば彼女は、尊敬する父親に言われるままに家族の重荷を引き受けてきて、やっと自分のための人生に足を踏み入れたのだった。思いやりが深く有能な彼女が、女性であるがゆえに受ける不当な扱いを克服するすべをみつけられずに、自ら命を絶ったと知ると心が痛む。

エリノアが活躍した時代から150年を経たいま、社会状況や家族の形もだいぶ変わったように見えるが、本当のところはどうなのだろう。エリノアを苦しめた矛盾は、現在の私たちをとりまく理不尽な問題と本質的にはあまり変わらないのではないか。いまの経済システムが弱者におよぼす重圧は、家庭内や人々の感情面にまで深く沁み込んでいる。公平な世界を築き、自分の居場所を持つために、闘いは続けなければならない。

tamura　shizue
田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。